

長男が東京で勉強していた時は、次男と三人暮らしたのだが、その次男も大学に入ってから、私達二人だけの生活になった。そのころは、家電製品販売、修理、電気工事店を営業、夢中で仕事していて、子供達は私達親元を離れて行ったが、時々帰ってくるし、家族の一員と思っていたから、寂しいとは思わなかった。そのうえ、次男が大学を卒業するまで仕送りしなければならぬから、なおさら頑張った。

昭和五十年、長男の東京電子工学院卒業と同時に、次男が大学に入ってくれた。仕送りがダブらなかつたから、子供達に親孝行して貰った様なものだ。若かつたし、苦勞とは少しも思わなかつた。長男の時も次男の時も、仕送りは誰よりも少なかつたが、一度も不満は聞いたことが無い。

昭和六十四年、近くに家電大型店が進出、とうてい太刀打ち出来ないと思ひ、廃業する事にした。店は比較的良好条件で貸す事が出来たので、余生を生まれ故郷で過ごそうと思ひ、知人の、使っていない古家屋付き宅地を求めた。古屋は解体し宅地を造成、九月棟上げにこぎ着けた。八割方、日曜大工で仙台より通い造作し、翌年平成二年八月、新居が完成し引越した。私が六十六才の時である。

サラリーマンだったら六十才の定年が過ぎ、第二の定年も過ぎた年齢であるが、体は至つて健康で老いた気がしなかつた。故郷で電気工事の仕事が舞い込む。温泉地帯の仕事や、仙台でのマンション新築工事現場の仕事が多い。

朝早く私は出掛けるが、妻は知り合ひの少ない田舎の片隅で、私の帰りを待つて居た心情を思いやれなかつた。とうとう我慢が出来なくなつたのだらう。平成七年暮、仙台でパートの仕事を引受け、残しておいた仙台の貸家の一室から通ひ始めた。

私は田舎の自宅から仕事に出掛けていたから、別居生活である。

休日と仕事の無い日は仙台で過ごしたが、三年程前、田舎を引き払い、不景気で借り手が無くなった二階を改装し、転居届を提出古巣に舞い戻つて来た。

妻は私より七才若く健康だ。勤め先が変わったが、朝早く出掛け夜になつてから帰ってくる、日曜日も休めなかった時もある。一ヶ月二十六・七日働いた月もあつたくらいだ。

私は年齢的に電工の仕事は無理になり、殆ど家で留守居役になった。主客転倒、私が主婦の仕事をする羽目になった。年期の入った妻の仕事の十分の一も出来ない、出来る事は、疲れて帰つて来て、すぐ食べられる夕食の準備位だが、それも満足な物は作れない。近くのスーパーで出来合の品を買つて来る。毎日が昔流の味噌汁と納豆、卵焼き位だったが、不平を言わず食べてくれた。主夫の仕事はよいのだが、妻が帰つて来る迄の時間が長い。一日中誰にも会わず、妻の帰りを待つているのは辛い。一人でじつとしていると雑念が湧き頭が痛くなる、工事現場に行き仕事をしていた方が余程気楽でいいか知れない。

蔵王に引つ越した頃、妻は毎日私が仕事から帰つて来ると多弁になつて話し掛けてきた。田舎の片隅で私の帰りを待つていた辛さが、そうさせたのだろう。

今年五月で妻は退職した。もう余生の歳である。私はパソコンで一日明け暮れ、妻は従来の家庭主婦に戻り、平和な生活に戻つた。

二ヶ月程前ある家庭主婦に夫婦関係の崩壊について相談を受けた事がある。

その時私は「今は人生航海の暴風に遭遇している時だ。何時か穏やかな日がきつとやってくる。真の夫婦になれるのは、老いて残り少ない歳になつてからだよ」と言った。

私は若い頃、船員だった時代に、暴風に遭遇、生死の界を彷徨つた事がある。「人生航海」は好きな言葉の一つである。